

日本書誌学と国語国文学

川 瀬 一 馬

一

ここにこの問題を論ずるに当って、問題の性質上、私自身がたどった研究生活のあとを省みながら考えてゆくことをお許し願いたいと思う。

昭和の極初年、まだ私が学生として専門の学問の基礎を広く心掛けて勉強している頃、K社企画の日本文学講座に「国文学と書誌学」という題で執筆するよう割当てられたことがある。既にその頃未だ公刊以前ではあったが「古活字版之研究」の内容は一応出来上っていたので、この問題について、ある程度の準備は持ち合わせていたけれど、二十代の若輩には、この大きな課題の内容をこなすには未熟であると考え、それは執筆せずにしまった。四十余年を経て、今ともかくもここにその宿題を果そうというわけである。

今から丁度半世紀前は、国語国文学の書誌学的研究の業績もまだ極めて少く、——（当時あったのは、古本節用集の研究（橋本進吉博士）・平家物語考（山田孝雄博士）・校本万葉集等であった。）——あれも出来ていない、これも見当らないというような状態にあり、それにもまして初心者が使う古典のテキストやその注解さえも殆ど皆無であったから、専門の学徒として徹底的に研究してゆこうとすれば、何もかも先ず自分の手でやってゆかなければならないと、意気に燃えざるを得ない時代であった。

丁度その頃、私は、東洋文庫で白鳥庫吉先生の東洋学講座を聴講する幸に恵まれた。この講座の内容と、それから受けた感動とについては、既に述べたことがあるが、この時の先生の広く深い見識に富んだ学問の収穫期の講義を伺い得たことは、私の学究生活にとって、一生の仕合せであった。白鳥先生の講義は、先生が東京帝国大学を定年で退かれ、大学の教室と同様な研究発表の場を欲せられて初められた講義であった。そのことは先生が開講の劈頭に自から述べられたことであるが、また、後に当時の文庫主事、石田幹之助先生からもあれは白鳥先生のために始めたのであると伺ったことである。この講座は秋毎に七年間連続したが、白鳥先生の講義の目的は、日本の神話伝説の本質を解明されるにあった。それは、こと皇室に関するもので、当時の社会としては、無論純學術研究でなければならず、一般に公開されれば誤解を招き生命の危険さえ起る問題であった。現に、先生も「ここへはK学院一派の人は呼びません。学説に対しては学説を以て反駁して貰いたい。感情的に反対して国賊呼ばわりをされるのは、真に遺憾である。」とも言われた。先生は今上陛下を御養育申上げた東宮御学問所の真の中心になった方である。先生も亦、紀記の神話伝説その儘では、現在の子供はそれを歴史的事実と信ずる筈はない。その本質を解明して、本来日本民族はこのようにすぐれていたのだ、かような特色があったのだと、はっきり承知するのではなければならないと言われた。

最近、待望の「白鳥庫吉全集」が出たので、私どもが伺った講義が公刊されることを期待していたら、その講義の草稿が紛失して所収できないとのことである。今の学界にとってこれ程惜しいことはない。先生は毎回、部厚い草稿を机上に置かれてその中から抜き出して話を進められ、何時も話すべきことが多く、毎回予定の三時間を超過される程であった。余り話上手な方ではなかったが、聞く方ではその内容の斬新にして卓抜なすばらしさに全く魅了されるのであった。こうしてここに先生のことを記していると、先生がずり落ちそうになる眼鏡を指で押し戻しながら、厚い原稿をめくって話をしておられる姿が、くっきりと目の前に浮んで来るのである。

私は大正十四年秋九月、最初から聴講したが、上にも述べたように、その春、東京高等師範学校の文科第二部（国語漢文専攻）に入学して、大いに専門を学ぶ意氣に燃えている際であった。私は国語漢文専攻の科へ入ったのだから勿論、国語漢文の古典を歴史的に学び、読解力を養うつもりであったが、その前、成蹊学園に学んでいた頃、教科書以外に、四書などを素読し、国語の關係は、学校の図書室に明治大正期のものが相当数あり、新刊の小説類などの文学書も多かったので、片っぱしからそれらに目を通し、古典は、古事記・万葉集・古今集・新古今集、伊勢物語・源氏物語・落窪物語（これは成蹊学園長中村春二先生の父君、秋香先生の大成という判りやすい口語の全訳があったから読んだのである。）・枕草子、平家物語・保元平治物語・方丈記・徒然草などを全読した。これらは中学校の教科書の教材として抄出されているものを、全部読んでみようと思つてのことである。一年生の時、徒然草から始めたが、その頃は平易に説いたよい注釈書もなかったから、徒然草でもなかなか難しいと思つた。しかし記憶はましであつたから読めば全文を殆ど暗んじた。その頃徒然草に親しんだことは、私の古典研究にとって有力な基礎の力となつた。方丈記などもその頃全文を覚えたのである。江戸時代のものは、雨月物語・奥の細道くらいのもので、所謂軟派物まで及ばなかったが、それらは教科書にも顔を出さないし、また学校の図書室にも、国書刊行会の一群の外には備えも余りなかったからである。けれども、幼少からのべつ芝居や寄席へ連れて行かれ、下町で暮した生い立ちが、後まで少からぬ役立ちになっている。また、それらの中で、私が古事記の神話伝説の内容に熟し、古事記を暗んずるようになったのは、国漢担当の鈴木友吉先生の影響であつた。

先生は變つた経歴の方で、三河刈谷の出身、海軍兵学校を胃病で中退され、神宮皇学館から東大の選科で倫理を専攻されたという。先生は教室の時間中にも紀記の内容に触れることが多かったが、私は先生のお宅にも伺つて個人的にも色々指導を受けた。太田亮氏が皇学館の同窓で、姓氏家系辞典の最初の出版を完成されたばかりの頃、先生のお宅で出会つたことがある。しかし私はその姓氏家系辞典一冊を見て、頗る苦心のものが、何となく中途半

端な感じを持った。まだ新撰姓氏録などをよく吟味しなかった程度の知識からの直感であったが、それは当時既に私が古事記を暗んじ、曲りなりに本居宣長全集の古事記伝などを繙き、日本書紀の神代巻などに首を突込んでいた故であったと思う。伴信友全集を見ていたことも役立ったかもしれない。また、津田左右吉博士の紀記を中心とする上代の新研究もよく読んだが、博士の説は変った新見ではあったが、中学生の乏しい知識からも納得いたしかねる点が少なかったのである。

こうして、私は中学生ながら古事記・日本書紀を踏まえて、日本の古代の歴史を専門に研究して見たいという強い希望を持つようになった。それで、国語漢文専攻の学科へ進んだが、学校の史学会（当時は三宅米吉博士が会長であった。）や、学外の考古学会（これも三宅先生が会長をされていた。先生は慶応義塾出身で、日本に新しく西欧の考古学の知識を導入して、明治時代に日本の考古学を科学的に確立され、白鳥先生も三宅先生の門下である。）にも積極的に参加した。考古学会の東大山上御殿における月例会の末席に数年間列ったことは、私の知識慾を大いに増益させた。そんな関係で、東洋文庫の白鳥先生の講義も承知したのであった。

白鳥先生の連続講義は、極めて雄大なるスケールのもとに、十分な準備によって聴講者に予備知識を与えつつ、——（またそれが或は先生の研究の進み行きでもあったと思われるが）——次第に網を手ぐるようにして中心の的へとしぼってゆかれたが、私とその素晴らしい白鳥先生の講義を伺って、新知識によって啓蒙され続けるといふ外に、もう一つ大きな刺激と教授とを得た点は、資料を体系的に処理する研究のこつであった。

東京高等師範学校という処は、旧制度の専門学校で、当時の中等教員を国家が養成する機関であったから、中等学校での基本的な教材をこなして教授する力、主として解釈力を養成するのが主目的であったため、四年間に通り主要な国語漢文の古典のテキストを読ませて、解釈させることにのみ力を注いでいた。そして、そのテキストの内容について、何かテーマを見出して考究させるというようなことは、一切教授しなかった。また先生方にもそう

いう研究をする方は少かった。文学史の類もあつたけれど、後述するように実はその科目も余りさような点には役立たなかつた。極端に言えば、隣接の歴史専攻の科などでも、四年間の先生の講義のノートを、そのまま持つて中等学校へ赴任し、講義の台本に使えるという類のやり方であつた。それ故、残念ながらたとへ秀才の学生でも、高等師範学校に学んだだけでは、まともな歴史学者などにはなれっこないのである。一旦学校を出て、さらに帝国大学へ進学して学び直すのでなければ研究ということ覚えることは困難であつた。

国語漢文専攻の科などは、研究の基礎になるテキストをよく読んでゐるから、さらに大学へ進んで研究に専心すれば、すぐれた研究を行なうことにはまことに利を得ていた。事実、東西の帝国大学が専門学校の卒業生を受け容れている間に、進学して研究業績を挙げた私ども文科第二部の先輩は数多く、どちらかと言えば、傍系進学者を好ましく思わない傾向のあつた帝国大学（それは一面において尤だと思ふが、）において、国語国文学科は、私どもの先輩が、一時期、どの大学でも講座を分担していた程であつた。

私は、東京高師入学の際に、丁度四年経つて卒業する年に、新しい大学（文理科大学）が開設されることに決つていたので、引続き進学することができると期待して受験したのである。大学にならなければ入りはしなかつたのである。

私が白鳥先生の講義を伺つて、研究のこつが呑み込めたについては、一つには先生が自由自在に扱われる紀記の伝説の内容が、幸に私の頭の中に具体的にはつきり入つていたからであつた。しかし私は先生の紀記の読みの広さと深さとは脱帽した。中学生の時に読んだ津田博士の新研究は、乏しい私の頭でも合点がゆかぬことが少くなかつたのに対し、白鳥先生の新説は、津田博士のそれよりもっと遙かに奇抜で、どこからあんな奇想天外な説が次々に出て来るのかと驚嘆する内容であるのに、皆一々尤もと諾けるものばかりであつた。現にその講義の席に津田博士も聴講しておられて、白鳥先生が、これについては津田君はこう言っているが、それはそうではない、これこ

れであると言われると、全くその通りである。

このことは前にも述べたことがあるが、私は、これは何故かと考えて見て、白鳥先生は高い山の上にのぼって山頂から大観し山麓にいる者には屈かない世界を見渡して説を立てておられるから、変った新説で然も妥当な学説が出て来るのである。津田博士の分はまだそれよりも低い山の上からの学説であるから、我々が納得しかねるのである。妥当な新説を出すためには、広く深く学ぶ以外に方法はないのだと、徹底して身に沁み込めたのである。

今一つ、先生の話を聞いていると、全く相反する二つの条件が提示されても、それがどこかでチャント一つの体系の中に、その意味が与えられてしまう。この魔術のようなことも亦、先生の学問が広く深い処から来るのである。私は今、渡辺善太先生の聖書学においても、白鳥先生と同様なことを感ずるが、向学心に燃える若き日に出会った白鳥先生のこの刺戟は私にとってまことに強烈であった。

私は、白鳥先生の講義に感動する余り、学校で直接指導を蒙っている松井簡治先生に向って、よその先生をしきりに讃めて一部始終を報告したものである。処が幸なことに松井先生は心の寛い方であられた上、白鳥先生とは同郷で親しく、年は余り違わないのに、結婚の仲人もされたという。そして、嘗って近衛篤磨院長のもとで、学習院で同僚であったから白鳥先生のこととは何くれと格別よく御承知で、世間に知られていない事実を種々話して下さった。白鳥先生が学習院教授であった間の勉強ぶりのこと、欧文で向うの学界へ常に研究論文を発表されていたこと、東京帝国大学へ聘せられた経緯、今上陛下の御養育に文字通り三顧の礼で迎えられたこと、松井先生が大日本国語辞典編纂の際、白鳥先生の忠告で、日本語の語源記載を見送りにしたこと、またその白鳥先生の日本語の語源研究の実績の歴大なること、そのためもあって先生が三十数箇国語を勉強されたこと等々、白鳥先生の話は尽きる所がなかったが、私はそれらを伺って、一層白鳥先生がゆかしく、尊敬の念を高めるのであった。

少しく後になって、昭和六年夏、まだ学生の身で私が「正平板論語攷」を斯文に公表したのを白鳥先生がご覧下

さつて、松井先生を尋ねられた時、「正平板論語放などというから、年功者の研究だと思つたら、若くて君の弟子だというではないか。」と感心して下さつたと松井先生から伺つた。松井先生も「あの者は君の講義を聞いて尊敬しているよ。」と言つて下さつたという。それまで私は一聴講者として先生のお顔に接するだけであつたが、もう少し後になって、東洋文庫に大蔵会の古経展示があつた際、初めて直接先生に引き合わされる機会を持つた。確かに安田善次郎大人のお伴をして行つた時である。その時、白鳥先生が安田さんに「何時も学界のため御尽力頂いて。」と挨拶されたのを覚えてゐる。

しかし、私が白鳥先生の学問と人となりとをよく承知した結果は、私の学問の指向を大きく転換させることになつた。それは、私が白鳥先生のとを承けて、日本の古代の歴史を研究しようとするには、先生の如く三十数箇国の言語研究の素養が必要である。然るに、私は成蹊に学んでいる際にも、英国のボンソンビー伯爵（当時の成蹊の変つた教育に興味を持ち、進んで英語を教授しに押しかけて来られた方で、日本の古代史に興味を持ち、日本に帰化して歿せられた。私はこの先生とは別の因縁があるが、そのことは前に一寸漏したことがある。しかし、現在の私の研究の立場からすると、先生に対する懐しさが倍加する。）に熱心に教授されたにも拘らず、早くから自国の考究に興味が集中し、また、当時はこちらのことを知りたければ向うから聞きに来ればよいという傾向が強かつたから、私もついその氣になつて語学の勉強を疎かにし、上級校の入試を賄えばよいという程度にやつていた。従つて、これから改めて大いに語学をやるということは、甚だ億劫に感じたのである。そのため、直接語学を必要としない研究に転ずることにし、紀記・万葉以後の記録文献を中心として学ぶ方に力を入れてやつて行くことにきめたが、これは従来からも既によく読んでゐることもあつたから、さして雑作もないという思いであつた。（しかし、後になって思うと、それ以後、私は三十数箇語の勉強と同等以上の異なる勉強をやる結果になつた。）

私は中学校の頃は、成蹊で變つたよい教育を受けたせいもあつて、趣味豊かに好きなことを自由にやつていた。

けれども、いよいよ専門を学ぶ学校へ入るという段階になって、今度は徹底的に専門を集中して学ぶ固い決心をした。早く専門を深く学びたいという強い思いが、私を一般教養的な旧制高等学校よりも専門学校の課程を択ばせたのであった。その後の社会生活を考えると、普通に高校から大学へ進んだ方が遙かによかったかもしれないが、今になって結果的に思うと、個人の真の学問の進み行きとその会得の結果とは、自分が歩んだ道を択んだ方がよかったと信ずる。この道を歩まなければ、もしも同じく国語国文学をやったとしても、現在の私の学問も、過去の業績も、恐らくは存在しえなかったであろう。今、キリスト教の信者としての立場から言えば、それはすべて神のみむねによるものであって、それが私の使命觀を完たからしめる定めであったのである。

私が東京高師に勉強した当時の学校では、上述の通り、国語漢文の主な古典を一通り読ませる点に主力を置いたから、専門科目として先ず第一年目に教室で学んだものは、増鏡・奥の細道、孟子・古文真宝・唐詩選の類で、漢籍を読む方が多かったのは国語は文法の講義などがあつたせいであろう。第二年目は、大鏡・枕草子・古今集・平家物語、論語・左伝・韓非子、支那時文。第三年目は、源氏物語・新古今集、詩經・書經・莊子、第四年目は、祝詞・万葉集、易經・老子という具合で、支那時文は二年からずっとあつたが、青柳恒篤教授が大隈さんの顧問で大のシナ通なので、休講の方が多かった。

その他に講義としては、国文学史・文学概論（これは垣内松三先生で、ドイツの哲学や文芸学を基にした講義は魅力あるが如くであつたが、国文学の内容からは離れていて、講義を受けた我々がそれを結びつけるには骨が折れた。）支那文学史・經学史等があり、その他国語学は、概論・国語学史、それに言語学概論と、何れも保科孝一教授であつた。先生の講義は、何十年一日の古ぼけたノートを、もっともらしく読上げるといふ内容の甚だ乏しいもので、然も毎年題目が変わつても、中味は殆ど同じという低級さには全く恐れ入つた。何事もいとも簡単に取扱われ、能狂言は室町時代の口語であるなどとあっさりやるから、私は「先生違います。」と言うと、先生は嘗て学生か

らそんな横槍的な質問に出会ったことはないと思えて、——（東大でも早大でも同じノートでやっていたに違いないのだが、聴講者は皆あきらめて問題にせずいたものと見える。）——まごつかれて、眼鏡がボーッと曇ってしまった、汗を拭き拭き、「そういう方面はまだよく研究されておりませんから、貴方お調べになったらよろしいでしょう。」と言われる。「先生、もう私は調べてあります。」と返事をする、重ねて先生は、「それでは発表なさい。」などと言われる。日常余りくだらぬ講義ぶりだから、その時間のムダが、専門を志す学徒の卵として何とも腹立たしく、生意気にもそんなことを幾度かやったけれど、その頃はまだ案外先生は、私の向学心を認めて下さっていたようであつたけれども、大学に進んだ後に、あることから先生は私にとって非常な逆縁となつた。そして、私の専門家としての進路を大きく曲げさせられることにもなつたが、この逆縁も、そのため私は何くそと大いに研究に励んだから、今になれば私の学問研究上には却つてよい成果になつてゐる（と思つて諦観してゐる）。

しかしながら、先生から無理な扱いを受けたことに関しては、長い間一切口を閉ざして来た。至らぬ私には、それは随分の辛棒であつた。けれども、近年になつて、私も氣持が沈静して来たのと、もう時効にかかつてゐると思われるので、その頃の私の外護者の隠れた有難い配慮を明らかにして置きたく、数年前、その一部を初めて書誌学誌上に告白したのである。私は国語学について、そんな講義を受けたため、国語学は学問にならぬなどと公言したことがつた。今日の進歩から見ると、半世紀以前の国語学などは、事実未だ極めて学的内容に乏しかったのが実相であつたと思う。研究著作の単行本なども殆ど無かつたのであるから。

前に述べたように、私が白鳥先生に徹底的な影響を受ける以前から、専門を学ぶ自由な境遇になつた際、学生中は、一切の娯楽を排して精進する決心を固め、高師四年と文理大三年の七年間それを実行した。そのため随分變つた孤介な人間に見られたようであつた。年少から芝居・寄席・活動写真（映画）などすべて見放題であつたし、その他勝負事でも何でも、見るもの聞くもの為るもの、悉く好きな都育ちであつたから、娯楽をとどめるといふこと

は、何ともつらいことであつた。しかし、私はそれをやり遂げて、すべての時間を研究に集中した。その頃のことには前に少し書いたものがあるので、ここに繰返さないが、先ず、明治以後のものは、前にも読んであるし、また唯読みさへすれば判るから、特に学ばなければ判りにくい江戸時代以前のものを一応悉く目を通すことにした。そこで、幸に上述の如く学校の教室で基礎的な力を養う主要な和漢の古典を学ぶから、それは何れも精読することにし、学校で読まないものは、多読主義にしてどんどん読んで行つた。結果として、その実行は、日本文学の全作品の内容を読んで、私の頭の中に国文学史が自然に形成されることになった。それ故、他人の書いたものを見ても、その人が作品の中味を実際に読んでいるかいないか、また、どの程度の読みであるか等がよく判るのである。また、松井簡治先生は、文字通り和漢の碩学で、何しろ独力で大日本国語辞典を編纂された程の方であつたから、その古典の解釈力は比類がなかつた。先生の教室での私の勉強のことは前に随筆「柚の木」に述べたことがあるが、先生から解釈力を鍛え上げられたことも、私にとっては又とない仕合せであつた。

なお私は、学校の課程で一番足りない、否、全く欠けていたと言つてもよい、自分で問題を拵んで研究するといふことも大いにやらねばならぬと考え、同級有志とカタラツて、研究会を起し、自分達で研究発表をやつたり、先生方に課外講義をして貰つたりした。それが大学になつてから研究の氣風を起す準備にもなつたと思う。いまさらここに言うのもおこがましいが、当時の東京高師は入試の競争率において、海軍生徒採用試験と双璧で、非常な高率を示し、国語漢文科なども最高時は、三十名に対して千人も殺到した。私の級友二十数名の半ば以上は中学校の首席、一割以外に席を置いたような者は一人もいなくなつた。それ程に全国から秀才を蒐めえた理由は、当時の世の中が不況のどん底にあつて、学資がいらない学校へ進学を目ざしたことで、また一つには入試が年末十二月の冬休中に、いち早く施行されたためであつたであらう。そしてその試験科目は、現在の国立大学の全科目的なそれをさらに上廻つたものであつた。私の一級下に首席で国語漢文科へ入学したN君は惜しくも夭く世を去つたが、

同君は第五高等学校（熊本）の理科へも首席で合格していた。五高ではそれを惜しんで、第一学年の夏休みまで、再三入学勧誘の手紙をよこした程であった。そういう仲間が少くなかった。それだから、私は最優秀の学生を全国的に蒐めておいて、徒らに詰め込み主義的にやっている学校のやり方が学生のために何とも惜しまれて、積極的に活動したのである。（無論、自分のためもあったが。）

松井簡治先生は、蔵書の富では有数の方であつたから、始終お宅へ伺つて、お話を伺つたり、古書を見せて頂いたりした。正直に言つて、先生の蔵書は私だけ木戸御免であつた。先生の蒐書は、実用主義から発したものであつたから、先生は私にも注意された。「活版で間に合うものは、活版を用い、活版になつていないものは、木版。さらに印刷になつていない場合は写本に及ぶがよい。」と言われた。私もそれを守り、幸に学校図書館にはかなりの蔵書があり、殊に木版本や写本、江戸時代の学者の自筆注解書入の本なども少くなかつたので、これを利用し、足りない分は松井先生の処へかけつけるという順序になつた。そのため、学校の図書館の本を全部見た勉強家だなどと噂されたが、それは殆ど事実に近いことである。

また、私が能狂言の研究にも志したため、その方面の研究資料は学校にも松井先生のお手許にも乏しかつたので、帝国図書館や早稲田大学その他の文庫へ捜しに向いた。これが広く外の文庫へ資料を探索しに行く一つのきっかけにもなつたが、その頃もう一つ私の研究にとって、仕合せになつたことは、山岸徳平先生との出会いであつた。当時先生は学習院の教授で、大塚に住んでおられたが、先生はマラソンをなさるので、高師のグラウンドなどで走り、学校の寮に立寄られたりされたから、自然に先生を知るようになったのである。当時未だ少壮の先生は、意気軒昂であられたが、既に篤学の聞え高く、そして、古典のテキスト・クリティク（本文整理）について意見を發表された直後で、これから汎ゆる国文学古典の本文整理をやらねばならぬ。そういう基礎を踏えて国文学の研究が行なわれなければと熱心に説かれる。日暮れて道遠しでは出来ぬが、若いうちから励めば必ず出来ると、激励される

ので、私の研究専念の思いは一層輪をかけられるのであった。

それからは常に先生の古写本校合のお相手を勤めた。この古写本の読み合せというものは、頗る解釈力を付けるものである。解釈力を養うには最もよい方法と言えよう。随分多くの物語その他を校合し、また珍らしい古写本などの臨摸もやった。それが尾州家の河内本(金沢文庫本)を中心とする河内本源氏物語諸本校合の仕事などに発展して行つたと思う。その河内本の古写本数種の校合のやり方は、私どもが考えた科学的なやり方で実行したが、まだ撮影のフィルムも現在のようではなく、またそれを拡大して読むのも、生物学研究の検微鏡を利用するという次第で、学生時代の片寄正義君や高橋貞一君等十数名を動員しての数年間に互る一大作業になった。

その間、有名な大阪の平瀬家の源氏物語を夏休に短期間(二回に分けて)借用して校合したのが一番大変であった。最後に一帖、部厚い「若菜」の巻が残し、約束の大阪行きは列車の時間が迫るので、目白の徳川研究所の入口で自動車に乗って待つておられる山岸先生に、私が片寄君を相手に全速力でやっとこさ読み較べて、車の中へ若菜の巻を投げ入れるように手渡したのが、昨日のことのように判っきり思い浮んで来るが、既に四十余年の昔である。そして、それと同時に日本一の美事な河内本の善本を手にして毎日源氏物語を読んだ日の幸福が懐しくかえりみられるのである。

私が書誌学的な研究をやるようになったのは、以上にも述べた通り、国語国文学の研究のためであった。けれどもやり出して見ると、書誌学の研究は、何もかも学問的には白紙同然であった。勿論多少手を着けられている部門もないわけではなかったが、それらは「古活字版之研究」の巻後に記した如くである。従つて、私としては、国語国文学の範囲で徹底的に書誌学的な研究をしておきたかったのであったが、日本における古書残存の在り方——(それは日本文化の発達のためならしめる所であるが)——は、国語国文学の範囲を徹底的に解明しようとする、表面的に見ても、少くとも漢字・漢語・漢文の表記の問題から、漢籍・仏書にまで及ばなければ、その実体を明白に

することはできないのである。書誌学の方で既にそれがやられてあれば、私どもは国語国文学の立場でそれを応用してこと足りるわけであるが、それが殆ど皆無な状態である。止むなく、(私の当初の目的からは外れることになったが) 書誌学そのものを徹底的に追い詰めないことには、さし当てる目標を果すことは不可能であった。やり出した以上は止むをえないということもあって、私は意識的に深入りし、結局、先ず日本書誌学を学問として成り立たせることに、一時期主力を注いだのである。それらは国語や漢文の論文著作として稔ったものも多くあるが、日本には官立の大学に書誌学という講座がないので、この学問を発達させる温床がなく、——それはまだ現在でもそうであるが、——書誌学を表看板に学者として生活して行くことは不可能に幾かった。

私も本来、専門は国語国文学である。大学卒業に際し、松井簡治先生は定年で退職されることになり、入れ代りに私を後継者として国語国文研究室の助手に据えて下さった。先生は私の卒業を待つて助手の席を三年間空席にしておいて下さったのである。当時の私は既にいくつも論文を発表し、国語国文学の研究業績は人並以上にあったが、書誌学の方へ深入りしていたので、(こういうことを口にしたくないが、止むなく言うと、) 国語国文学の教室の周囲に群がって一つしかない位置を狙っている多くの世慣れた年長の仲間が、私を専門外の者として排斥する口実にした。先の保科先生も「川瀬は本屋の番頭になった。」などと陰口を言われ、私と競争しようと思う連中の悪声を利用して、どう保護しようと思っても、かばいきれなくなつたから、やめるようにと、辞表の提出を強要する理由にもされた。こと志と違つた私は、周囲の先生方に意見を伺い、暫くの辛棒であると考えて身を引いたが、一時的と思つたことが永久的なことになり、私の社会生活の運命は大きく変つたのである。

当時の私は、自分がやるうと思つている学問の範囲が、何もかもこれからの世界であつたから、新しい大学に席を与えられた上は、これから既成大学を向うに廻わして、一大奮闘をしようと、種々の夢と抱負とを持つて超人的に勵んでいた。その芽を何も知らない人間に無難作にへし折られたことは、何としても残念であつた。それはもとよ

り私自身の不徳のいたす所であろう。唯私はいたずらに学問などにこだわるわけではないが、然るべき伝統と学風とを持つ学校の卒業生として、母校の学究の中心ともなつて専心活動したいと願うのは、誰にも許される人情というものであると思う。私は、それからあと、半ば止むなく、自分が過ぎて来たような道を歩んだけれど、その結果は、一面において、私の学問研究の一生には仕合せな巡りあわせになった。しかしそれは多く自分で意識的に思ひ量つてやったことではなかった。私は、その時その時、一所懸命に全力を尽してやっただけである。それが結果的にはよかった。重ねて言うが、今の私にとっては、それが私の使命観を完うさせるべく神が導かれたことであったのかと思うばかりである。唯、結果がよかったからそう言うのではない。

私は国語国文学を専攻する初志で、そのため漢文をも併せて学んだが、東京高師では、漢文の時間が多く、殊に上述の通り、四書・五経・老莊などを一通り読破したので、漢文読解の力は専門家同様に培われた。その上、大学では漢文学の勉学を漢文学科の諸君（三人）と一緒に三年間注疏を読んで更に力がついたと思う。そしてまたそれは、仏典を扱う上に、仏教を学ぶ上に、大きな力となった。仏典を読みこなす根本は、漢字漢語の正確な知識、漢文の読解力である。古しえのすぐれた名僧知識も皆漢学に秀でる人々であった。

従つて、私は国語国文学の国書から漢籍・仏典へ範圍を拡大して研究すべき書誌学が、大した負担にも感ぜず、自然に段々研究が進展したような次第であつた。

二

書誌学という学問は、聖徳太子以来実に多くの古書籍・古文書が豊富に残存している日本では、その歴史的発展の跡を、確実な資料によつて体系的に整理研究することができる学問である。実証的な学問として、自然科学の学的方法を最も実施し得る精神科学である。科学的に研究し得るといふ点において、これに及ぶ学問は他にあるまい。

(然るにその一番根本的な古書籍の時間経過の問題は、人間の感性にたよるはかはない現状である。目下の処、千数百年以来の年代経過の差異を高分子的な方法で精密に検査するまでに至っていないからである。)

私個人の学問研究の生涯について、学問の発達のため参考になるから、是非自叙伝を執筆するようにと勧められている。甚だおこがましいような感じもするが、考えて見れば、自ずから省みて、学究として珍らしい人生かもしれないと思うので、そのうち実現させたいと願っている。極くかいつまんで言うと、過去に国語国文学と書誌学とを兼修した結果、殊に書誌学のため徹底的に日本の文献を考究した、その歴史的な実証研究と、国語の歴史的研究とが私の頭の中に整った結果、文献以前、さらに考古学以前のところが、換言すれば、日本文化の原始の所が、類推的に考究できるようになった。実証を伴う書誌学という文化史の有力な一系列を究めた結果が、さらに幸して、私は、若い日に、白鳥先生の講義を聞いて一旦はあきらめた、日本の古代の歴史を考究する基礎が与えられることになった。そしてそれは、私が歩んだ道以外の方法では、その研究を望むことは殆ど不可能な条件であることも、明白である。これは自分で実践し到達して見て初めて判ったことである。

従って私は、口幅つたい言いぐさになるが、私がやっただけの学問研究の基礎と準備とがなければ、如何に感性がすぐれた学究であっても、日本文化の本質、古代の日本文化の実体を解明することはできにくいと思う。結論的に解明してみれば、何でもないことのようにであっても、学問的な根拠を与えて、何人にも諸けるような説明をすることは容易ではないのである。私は、これまで体系的な研究著作を公表する場合に、一挙にこれを公刊し、小出しに発表することをして来たが、今回もそうしたいと思っている。目下の私は、自分では書誌学を通り抜けた文化史家として研究に従事しているつもりであるが、世間では専ら書誌学者として見てくれている。それは私にとつては反って大変仕合せな結果になっている。

余りよい譬えとは言えないが、私はこれまで、国語国文学と書誌学との両刀道のようにして暮して来た。宮本武

蔵程に腕が冴えているかどうかは別問題として、この二刀流を、今度は敵流島の決戦の長い刀ではないが、一大長刀に代えて、正眼に構えて文化史の研究に立ち向って行きたい。それが今の私の望みである。

そのため私自身は、書誌学は一先ず卒業したいと考えている。しかし、その学問の立場は、私の文化史研究の有力な一支柱でもあつて、これを大切に考えてもいるし、また、現在の自分がやっておく方が、将来新しく誰が着手するよりも容易に出来てしまうと思われる類の、やり残してある研究を纏めておく義務があることについても亦十分責任を感じている。そして、書誌学が実際に他の学問に応用されて寄与するのは、まだ私がやり残した書誌学研究の種々の分野である。然も、それら他の学問で必要とする書誌学の実際の知識は、むしろ文献として纏めて発表されずに、私の頭の中に蓄積されている部分が多いと言ってもよいのである。それ故に、現段階においては、直接私に質問されれば、恐らく実際問題は直ちに解決されるであらうと思う。

日本において、ともかくも書誌学の学問体系を最初に樹立した立場の一員として、日本書誌学は、何百万かの古書を実際に手に取って調査を行なうという、実証の結果組織された体系であるから、調査した一々の資料的知識は、それぞれ正確に定められて私の脳裏にあるわけである。勿論学問の性質上、まだ私が実見していないものもあり、また新資料が発見される可能性は限度がないが、少くとも今後将来再び私が体験しただけの実証を後生の研究者が踏み直すことは、恐らくは不可能と言ってもよいであらう。従つて広く学問のため、私がいなくなった後のため、それらについての配慮をしておくことも亦、この学問の開拓者としての私のなすべき勤めであると考えている。私は、何とか自分に与えられた残りの時間を大切にして、書誌学のためにも努力したいと念するのである。

今ここに掲げた「日本書誌学と国語国文学」という題目についても、私の研究の主力は、今やその領域を飛び過ぎようとしている状態であるから、私にとっては、今の際、これを考えておくことが必要であると思うのである。

日本書誌学と国語国文学とは、全く異なる学問である。国語・国文学も、今でははっきり国語学と国文学とに分

かれて発達しつつある。(会員の集合団体としては、学会という名称で、さらに小間切にこまかく細分されている。しかし、実際の研究も次第に詳細に進展しつつある。)そして、その両分野の中、何れかと言えば、目下は国語学の方が日本書誌学と密接な関聯のもとにある。それは、国語学の諸氏が古訓点などの調査研究を言語研究の資料として盛んに探索しているため、古経巻などを多く取扱うことも主な原因である。書誌学の知識がなければ、折角の研究も役に立たなくなってしまう。それについては前に注意したこともあるから、ここでは省略する。

私は、国語国文学と日本書誌学との両方をやって来たから、この問題を考える場合に、国語国文学の立場に立つて日本書誌学を論ずることも出来るし、また、日本書誌学を基にして、国語国文学との関係を考えることも可能であるが、ここに特に「日本書誌学と国語国文学」と題したのは、日本書誌学を専攻する立場の学者が他に乏しい点と、今一つ重要な点は、現在の国語国文学の世界が、もし日本書誌学の研究が私の意図する理想の域にまで充実すれば、研究の容相を大きく変貌するに至るであろうと考えるからであり、また、それを強く希望するからでもある。

現在は、前述の如く、まだ日本書誌学がその研究の実際的な業績を充実していないため、隣接の学問に対して、甚だ不便をかけていると言ってもよい。書誌学が書物を研究の対象とする限り、これまで汎ゆる人間の文化がすべて記録により書物の形をとって伝播して来た以上、どの学問も全部書誌学と直接関聯を持つ。しかし過去においては、殊に宗教、歴史、文学等の書物が最も多数を占めている関係上、書誌学的な研究も、主としてこの三方面から行なわれて来た。そして、それが書誌学の研究をも進めて来ている。

その他に日本では、外来文化の大きな影響を蒙っているため、書物も、過去において、仏典、漢籍、国書という三大別があり、又、明治以来は、これに洋書が加わり、(実は嘗て江戸極初期にも例外的にキリシタン版等が若干存在する。)さらに、装幀から分けると、和装と洋装とがある。かように書物の実体が複雑であるということが、書誌学の研究をも困難にする一原因であるが、内容上から言えば、日本書誌学としては、国書が中心になるべきが

当然である。然るに、明治以前の古書籍の残存状態においては、仏典と漢籍とが半ば以上の多数を占め、遡れば遡る程、仏典が増大している。けれども、その仏典も漢籍も、わが国人の注解が加えられているものが多く、極端に言えば、向うの原文に振仮名訓点が施されているものは、すべてわが国人の翻譯もしくは注釈が加わったものと見て、国書に準じて扱うことができるのである。それらは、もし広くわが国の文化史研究資料として考えるならば、何等、日本人著作の書物と区別する理由はないのである。

日本書誌学の研究において、何がなさるべきかは、既に「日本書誌学概説」に述べてあるから、改めて重言しないが、先ず第一になすべきことは、日本国現在総書目の編纂であろう。日本にどれだけの書物が出来て、また輸入されて、それが現実に書物の形態で、どこにどういう状態で残存しているか。それには、刊写の年時、別時の加筆、筆者、装幀、料紙、伝来その他を正確に審定して明記することである。それと今一つ、内容の異同の有無を明示することである。形態上の問題は、書誌学個々の研究範囲ではあるが、言うまでもなく、内容の記載がなければ書物ではないのであるから、書誌学としては、書物の内容も亦、研究の対象である。けれども、内容は、各々他の学問の専門領域になるから、その点においては、研究が互に交叉する。従って、一方の研究が進展すれば、自ずから他方に影響を及ぼし、相互に研究が発展して行くことになるわけである。また、写本を主体とする時代にあつては、書物の内容表現は流伝の間に変転するのが原則であるとも言えるから、この異本発生の問題は、書誌学研究の対象として一つの大きな部門である。書誌学を研究する者は、内容の勉強もやらなければならぬが、実際にはそれぞれの専門家に協力を求めることになるであらう。

然しながらその間にあつて、書誌学者がどうしてもやらなければならぬのは、その書物の書写年代、または刊行年代の審定である。それこそ書誌学者の研究の中心の課題といふべきである。それには他の種々な条件を参考にすることはあろうが、それを判じ定めるのは、書誌学者の「養われたる感」である。現在、まだすべての日本の学問

が、自国の資料を基礎に踏まえて本質的な研究を行なうという方面において甚だ遅れているが、特に、足りないのが、それである。文学・歴史その他で書誌学的な研究に基く業績が多く出るようになったのは喜ばしいが、その取扱う範囲だけの古書の知識に限られた見識で処理されたり、また中途半端な鑑識眼で行なわれたりすることが少くないのである。これは大きな欠点と言わねばならぬ。

内容を比較してその本文の系譜を考定する場合にも、写本ならば書写の年代、版本ならば出版の年代を次序するところが第一である。勿論その年代の審定は、書写相や版式も亦複雑であるから、その年代の境目の所は多少の幅が生ずるのは止むをえないが、それは多くは他の条件が伴えば解決するものである。しかし、ある本の書写年代・出版年代が古くても、その内容は、却って他の後代の写本・版本よりも新しい場合がある。その事實は、その書物の伝流の複雑さを告げるものであつて、このことはまた原本文に遡る校定作業を行なう場合において重要なポイントである。ここに、かりに平安末期の古写本があり、またその内容を増補した室町初期の写本があるとした場合に、今は残っていないとも、室町初期の写本が、他の平安末期写本と同類の別本を基にして増補していることもあり得る（むしろ古い頃に多く流布していたものが、今日僅かに残存している場合が多いから、その方が普通のケースである）から、現存の両本の内容だけを比較して、その出入により両者の関係を簡単に考定することは、結論を誤ることになるわけである。

専門外の人のために、書物の内容を解題した類の編纂物も亦必要である。しかしそれは、今ここに私がいう日本国現在総書目と切り離すべきであらう。それは専門研究と一般啓蒙とが混交する故である。

私はこれまで、幾度か古書の善本を多数蒐蔵される文庫の善本書目を編んだことがある。その際、私は書誌学者としての立場で著作するのであるから、各書物の書写年時、筆者、刊行年時、刊行者等の審定を第一とした。勿論、書物の内容が他に伝存せず、天下の孤本とか、それに幾いものなどについては、その内容も紹介解説しなければな

らぬが、源氏物語は何が書いてあるとか、河内本とは何かとかいう類の説明は一切しないのである。もしも専門外の素人の無知識な者が、あの本は何が書いてあるのか知りたいという要求があれば、それはたとえその蔵書主であっても、当然他の書物や説明によって承知して貰うべきものであろう。そのためその要求に応うべき良指針の参考問題がなければならないことは言うを俟たない。現在はそれも未だ十分整っていない状態である。それ故、現在、目の前にあるようなもので辛棒しなければならぬのである。なかなか完全なものは望めないにしても、私どもから批評すれば、随分骨を折ってやったものではあっても、根本的に肝心な能力が乏しく、知識が足りない人々が、いかに努力をしても、所期の目的は達成されぬのみか、どういうことをしたら一番よいかということさえもはつきりつかめないものだと言ってもよい。自分でやらずに批評だけするのは、易いことではあるが、私は書誌学をやって、今ここで上述のことを論ずる立場から、自ずからの反省として言うのである。序でに付言させて貰うと、私には、国書解題については、戦前早くに二つのことがあった。

その一つは、松井簡治先生が私に国書解題をやることを勧められたことである。私が日本国中をめぐって珍しい書物を沢山見出す上、また、広く勉強しているということもお認め下さったの慫慂であつたと思う。私は折角の先生のお言葉ではあつたが、何時も唯聞き流しにしていた。その時の私には、これからの研究者としてき様なやりがいのない仕事をするつもりは毛頭無かつたからである。むしろ先生は私の学問研究の意欲をどう見ておられるかとさえ疑問に思つた程である。先生は大日本国語辞典を独力で編纂されたような方であつて、そこに集中するまでには、いくつか解題・索引的なものの編纂も意図されたようである。それは、先生の集書の内容が示している。その頃、佐村八郎の国書解題程度のものしかなかつたから、私の多見に期待されるのも尤もであつたが、私は一生のうちに、いくつも体系的な研究をやりたいと準備していたから、その時は一顧もしなかつたのである。現在になれば、既に種々のテーマの研究のやつた上、且下国書解題にもまさる大きな編纂事業を一方でやっているから、或は

一人で徹底的にやってみるのも面白かったかなと思うだけである。そして、前述の意味で、書誌学者としては、大きな仕事をやり残しているという責任は感じてゐる。その種の仕事をし残しているということは、往時国書解題を勧められても見向きもしなかった理由とやや通じてゐる。(それに対する自分の言い訳は別にあるが、今は述べない。)

もう一つは、昭和初年に岩波書店が最初に国書解題を企画した時、辻善之助・新村出両先生を顧問に戴いて、その両先生の御意見だと言つて、編集の主任の梅氏(物故)が私の許に來られて、国書解題を専門家に分担執筆して貰うについては、貴君だけしか知らない珍しい書物の名を全部書き出して貰いたい。やがてはその解題も書いて欲しいという申し出である。私は即座にお断りをした。私の思うには、今私に分担せよというそれは、実は顧問の先生方がおやりになるべきものではないか。私は両先生ともよく存じ上げている。それで、両先生からあの者にということであつたかもしれないが、私はこれから研究してゆこうという初心者である。苦心して見付けた新しい資料は皆これから順次研究して発表したいと思つてゐる。それを今直ぐ全部他人のために吐き出せとは、甚だ虫がよいことではないか。また、私だけしか知らないようなものは、たとえ数があつたとしても、啓蒙的な解題書には必ずしも所収されなくてもよいと考える。仮りに私自身が主宰して編集するなら仕方もあるまいが、けちなことを言うとおっしゃるようではあつても、これから研究して行こうという若輩の私の立場としては、これは当然ではないか。「梅さん、貴方もそう思ひませんか。」と反問したら、梅氏は穩健な人柄の方であつたから、「貴方のおっしゃることは御尤もです。」と言つて歸られたのである。

書誌学と国語国文学との關係には、種々細かい問題があるが、今一つ大きな問題点は、本文批評(本文整理)、現存の諸本を比較して、原本へ遡る作業に関することである。勿論それは、写本を主とする時代、写本と版本とが併行する時代、版本を主とする時代、と条件も方法も變つて来るが、それらに關しては、ここに詳述しない。この方面の業績としては、大正年間に営まれた「校本万葉集」が最初の試みであり、新しくは源氏物語・土佐日記や枕

草子等のそれがある。また最近方丈記などにもその類が出来ている。しかしそれらは何れも私が考える原著者がしるした本文に回復すべき目的のやり方として当を得ていないと思われる。

校本万葉集が実は最もよく出来ているのであるが、そしてこれにはその比較の結果から、諸本の本文系統表も添えられていて、各本の系統が判然としている点は結構であるけれども、そこに提供されているすべての伝本の本文の異同表は、実は各伝本の系統を考定すべき準備としてなすべき作業である。それをも印刷公刊して悪いということはないけれども、原本文を想定すべき校本として示さるべきは、各系統の祖となった数種の古写本のみの厳密な異同表示だけでよろしいのである。「万葉集について序でに付言すれば、万葉集は平安末期の古写本（所謂古筆）が数種残存しているが、それらは習字の手本として書かれたものと見るべきものが多く、もし書写し違えても、字面の汚損を憂えて訂正しないなどということもあり、また万葉集の半ば以上は訓が付けられなかった時代のものであつて、古写本が必ずしも後の伝写本よりも本文内容がすぐていれるとも言えない点などがあつて、新古の写本の伝流関係が複雑な条件になっているという特色がある。」何れにしても系統論が行なわれた結果は、最少限の伝写本の比較によつて、その目的を達することができるのである。或はもし後の学者の研究等により、中途の伝写の誤脱を明らかにし得る部分があれば、それは参考として注すればよいのである。今の校本万葉集では、あれに出てくるからと言つて、新しい本の後の改変異同も取り上げて、自分の説に都合いいように本文を訂正して勝手に解釈を行い、学術的だと考えている輩が現われるのである。

源氏物語の校本——実はこれまた大事業である——なども同様であるが、これなどは多くの伝本で較べたといふみせびらかしの感さえあつて、然も、これらの作業は毛細管現象の末端をおさえて心臓に達する体のものであるから、他人にやらせて、それをうわべで統率するというようなやり方では、真の系統論はできにくいのである。漢字表記と違つて、仮名表記の書物については特にこのことが重要である。源氏物語などは、河内本の原型、青表紙本

の原型、それにもしその他があればそれらの僅かな異本の祖本にまで遡る系統論を行なつて、その各系統の祖本なる僅少の伝写本を比較表示すれば足りるのである。しかしそこまでの結論が出される底辺には、すべての現存写本・版本乃至は多数の書入本などを比較する下働きの蔭の作業が必要である。それ故に、みせびらかしの宣伝精神に富んだ人のすることではないのである。

私が学生の頃、松井先生は、池田亀鑑氏を教え子の一人として注目し、先輩として会つてみるがよいと特に紹介されたことがある。それで私は当時池袋駅近くにおられた氏の宅を訪れたことがあった。丁度東京大学を出て、その才能を認められ、源氏物語古注集成の仕事を担当してやつておられる忙しい折で、その原稿などを出して示された。私が手にとって拝見すると、もう大分書き進んでおり、歴史的に古注が抄出されてあったが、一見して、当時の私の知識からでも真ぐ疑問に思つたのは、第一に古注はそれぞれ依拠の本文が異なること、また古注の中にも本文異同が少からぬこと、それらをどうされるのかということであった。私がそれを池田氏に質問すると、そうなんです、それは後から較べるのですとの答えであった。それは大変ですネと言つと、そうなんですと返答されたが、私にはこういう書き方をしてあつては、事実後からということとは不可能ではないかと案ぜられた。卒直に申して、それは書誌学的見識の不足に基くものであつて、折角の重要な作業が眞の役には立たなくなるという結果になってしまうのである。

私はこれまで手許に多くの書物を比較した校本を持っている。そのうち整理をしておして公刊したいと考えているものはいくつもあるが、特にその二三については、国文学の古典の作品の本文批評のまともなやり方の基準として発表して置きたいと念じている。今まだ他の企画の仕事に追われていて、それらを最終的に整理をするいとまがないが、数年後には逐次公刊できると期待している。

最近、「系譜法」による原型溯源が日本の文献にあまり有効ではなく、現実に不可能であるという強い批判も提

出されているなどと言っているのを、ふと見たが、私に言わせれば、未だ何もやって見もしないで、また現存資料についての知識も不十分で、かようなことを軽々に論ずるということは、甚だ足りないことであつて、真に遺憾であると思う。

勿論、写本を主体とする時代の作品において、異本が数多く存在する場合に、その作品の諸伝本の系統的研究は、その原型を探究することが重要な問題となるが、同時に各異本の系統的位置づけが明確になることも亦同じく重要な課題である。それは作品の性質と社会の情況とによつて異なるものがあるが、その作品が後世流伝中に変形した内容、原型の本質に沿うて展開しているものの、それはその作品を享受した社会の産物として、新しい意義と価値とがあるからである。文学作品ではその例が頗る多いが、文学作品でなくとも、社会に長い間続けて広く行なわれたものには、その現象が著いのである。

なお、この場合に、原の本文はその儘の形を存し、その注解などにおいて、新しい意義が増加せられて、古典の本質を活かす働きをしているような現象が少くない点などについても併せ考えることが必要である。

また、作品によつては、原型探究において、著者の原稿が二種以上流伝し、それが複雑に交流して行なわれている場合も多いのである。これは原型探究作業の研究を困難に導くが、それはむしろ書誌学研究者にとっては、研究しがいのである仕事であると言つてよい。また、それは書誌学者のあり方を示唆する問題でもあらう。学問というものは、どこまでも専門の筋は判つきりしていなければならぬが、いくつかの学問を一人の身に兼修して総合的に研究することが、必要であることは言うまでもない。分化は比較的容易であるが、総合は難しい。難しくても、それが行なわれなければ、学問研究の真の意味は果せないのである。

現在の処、国語国文学の領域では、現実に書誌学的な研究が多く行なわれているが、その目的を達成するために、書誌学の正確な知識による協力（あえて指示とは言わない）がなくてはならないと思う。そのためにも、書誌

学は自ずからの領域の研究を充実させることが肝要である。専門研究家の乏しい書誌学は、これから先、是非とも優秀な後続研究者が望ましい。その後継者の養成の問題は、私ども僅少な専門家の肩にかかっている責任ではないと思うが、書誌学者は根本に感性のすぐれを具えていることが絶対に要請せられるから、唯単に研究者の数が多く輩出したからと言って、その根本が充たされるというわけのものでもない。そこにさらに難しい条件が横たわる。五の力の者が何十人いても、六の力を持ったもの一人には及ばない、量より質の問題である。私に対し、(書誌学の)学問の後継者があるかと心配して質ねて下さる方々が決して少くはない。その度に私は、「残念ながらありません。私がいなくなったらまた出て来るでせう。」と答えるのが常である。

わが国において、当面、書誌学を起こすために着手すべき最もよい方法の手始めは何か。それについての唯一の方法と言ってもよいが、それは、有力な国立大学に速かに書誌学の講座を設け、専任の教授を任用することである。当面は死馬の骨を百金で購うことになるが、必ず次の時代には斯学が起って来ると思う。それに具えて、私は極力自分が研究した結果を書き残しておこうと考えている。日本民族は不朽、学問も亦不朽。——『励まざるべけんや』。(癸丑九月九日)

